

明治26年吾妻山殉難記 百年史の一こま (4)

佐藤博之(地質部)
Hiroyuki SATOH

最近ではほとんど忘れ去られているが 1890年を前後した19世紀最後の時期に 福島県は連続して火山災害に襲われた。先ず明治21年(1888)7月15日早朝 磐梯山が突然大爆発を起こした。桓武天皇の大同元年(806)以来の大爆発である。この爆発もこれによって現在の猪苗代湖が出来たと伝えられる程の大爆発ではあるが明治21年の爆発は物凄かった。午前7時15分 一大爆音と共に主峰の一つである小磐梯の全山が一瞬の中に跡形もなく吹飛んでしまった。土砂は森林を埋め 村落を破壊し 檜原湖以下の湖沼が本当に出来たのである。破壊された部落は7 失われた人命は461名と数えられている。

この印象がさめやらない明治26年5月 今度は近くの吾妻山が活動を始めた。当時の官民共にこれに対して大きな注意を払ったのは当然であった。地元福島県は早速これについて中央に調査を要請し 中央はすぐに調査官を派遣したが 未曾有の悲劇が結果的に生じたわけである。火山噴火についてのプロジェクトが実施されさらに調査の対象が複雑多岐になっている現在 もう一度当時を振り返ってみることは重要なことであると考えられる。なお福島県では明治33年(1900)に安達太郎山が噴火し この多難だった19世紀を終えた。20世紀も終わりに近づいた現在 これらが重要火山に指定されていないとは言え 1950年には吾妻山 1954年には磐梯山の小活動があり なお予断は許されないものがある。

5月19日第1回爆発 5月19日午前11時26分から鳴動を始めた吾妻山は 同30分轟然として黒煙を發し 岩石と火山灰を北を除く3方向に降らせた。火山灰は主に北西から南東に向かって降下し 多量の水蒸気を含んでおり その上に残雪もあった結果 あたり一面はたちまち泥土となった。噴火したのは一切経山の南にある硫黄山の南で北北西-南南東方向約400mの間に大小の噴火口が配列して 噴煙はそれから上がっていた。硫黄山の南腹で 噴火口の列から約100m 東側に直径約100mの大穴と言う円形の火口があり 約80年前にも噴火し 明治初年までは蒸気を噴出していたとのことである。大穴の南に泥湯と言う小温泉があって 明治2年頃から熱湯を約1.5m程の高さに噴出し 手を浸すこと

の出来ない程高温だったが 噴火近い頃には単なる温湯が出るだけであったそうである。

吾妻山の爆発は比較的その規模が小さかったにかかわらず 直ちに当局の注目を引いた。それは磐梯山爆発の記憶が生々しかったのと 丁度震災予防調査会が発足した直後のことだったからであろう。福島測候所長の飯塚清通と所員の近藤力次が吾妻富士に登頂したのは20日朝だった。爆発翌々日の21日には東京から三浦宗次郎 石井八万次郎 山崎直方 田中館愛橘 大森房吉らの人々が火口近くで調査に従事していた。もちろん三浦は地質調査所から派遣されたことだし 他は大学から出かけた者である。ただし西山がこの時加わっていたかは明らかでないが 後述の鉱山雑誌は加わったとしている。21日には泥湯の付近にあった甚兵衛小屋から噴火口の方に進むと 火山灰は泥となって 一度足を入れると腰まで達するところが多く その困難さは経験した者でなければ判らない程だったと言う(石井・山崎 1893)。三浦は田中館及び大森と同行し 石井・山崎のグループを互いに声をかけ合って進んだ。

三浦は調査の結果を直ちに復命書として提出した(三浦 1893)。結論として今後これ以上の活動はなく 時日の経過に従って勢力を減じ 降灰も止むだろうと言うものであった。

第2回爆発 6月4日午前4時から5時にかけて活動が再び始まった。それは東方に約4km 離れている微温湯^{ひんぬ}で建物が大きく震動する程だった。この報告が東京に届くと三浦に再び調査命令が出て 5日に西山を従えて出発した。この出発は実は第1回に調査した鈴木敏が命令を受けたが気が進まず 技師一同がくじを引いて三浦に決定したとの因縁話が伝えられているが(小川, 1938) 他にこれを確証するものがなく 第1回調査は前述の様に三浦であるので信頼出来ない。若しあったとしたら第1回調査のことであろう。鈴木は磐梯山噴火の時に調査していなく 大塚専一が調査した。一方東京帝国大学では小藤文次郎が学生の比企 忠と西和田久学に命じて調査に赴かせた。震災予防調査会からは再び大森房吉が出かけることとなった。当時第一高



第1図 三浦 西山阿氏の遭難位置
(国土地理院25,000分の1福島及び吾妻山)

等学校学生として地質学を志していた小川琢治も比企と西和田に同行しようとしたが 養父の病のために断念したとその回想の中で述べている。

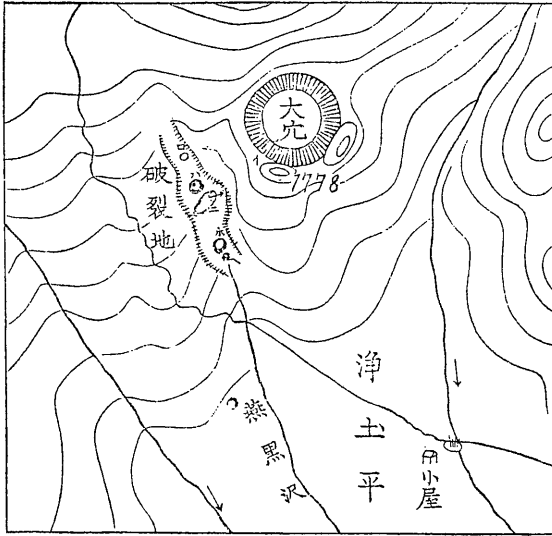
比企と西和田は5日夜福島に到着し 6日未明に一切経山に向う途中で 三浦 大森 県庁担当官一行と会って同行することになり 一行は午前9時に白津村に到着した。11時半に微温湯に着いて情報集収を行い 2時半頃浄土平東入口に達した。この日は小鳴動は間断なく続き 大きな活動は5時間毎に起るものと観察された。

三浦は福島に到着した時に第1報を書き 微温湯から出発する前に第2報を書いた。この中で石塊の飛散は前回より遠距離に達し 甚兵衛小屋も少しく破損したらしいと述べている。6日の晩微温湯から郵送した当日の調査報告が遂に彼の絶筆となった。6日は晴天であり 噴火口の周壁を一回りすることが出来たし 明7日には再び登山調査を行って土湯に下り 8日には福島に出て直ぐ帰京すると述べている。

翌7日 大森と学生1名及び県庁の担当官は下山して
1985年10月号

行き 三浦・西山・比企・西和田と人夫1名は午前5時に出発し 9時に浄土平に着いた。以下遭難の様子は比企・西和田の地学雑誌 東京地学協会報告 東洋学芸雑誌と 鉱山雑誌所載の桐原警部の知事への急申書による。この日は風が強く堆積している火山灰は風と共に舞い上がり歩行は困難だった。ひと休みした後再び4人一列となって前日の道をとったが泥の海の中だった。比企は作図していたため3名とは離れ西和田は泥の深い所に入って2人と数間を隔てた。ところが西和田は歩きやすい道を見つけて比企を呼んだため 西の方にそれて 噴火口から120-130間の所に達した。その間に三浦・西山の2人は道を見つけたらしく 火口から20間ばかりの所に達し 比企を呼んだ。丁度その時午前10時に爆発が起こり 大小の石塊が散乱して来た。この時の状況は比企・西和田の2人をして「生等禿筆の能く記述すべきにあらず」と述べさせている。

比企は伏せて運を天にまかせ 西和田は西へ避難し 5分ばかりして漸く飛石が少なくなつてから比企は西和田の所へ行った。しかし三浦・西山の2人の安否が判らないので大声をあげて西口近くに進んで70-80間ばかりの所に近づくと小石がまだ雨の様だった。西山は先程の所に仰向けに倒れ 呼び声に1度は応じたが身体の自由はきかない様だった。三浦は歩行して2人の40間ばかりの所まで来たので 2人は相談し西和田は三浦を助け 比企は矢筈湯にいる人夫を連絡に当たらせることにした。西和田は三浦を負うとしたが脚は泥にとられ 右手は不自由で 2人で泥の中を倒れる状態だったが それでも20-30間を連行した。三浦はそこで「どうい歩きことが出来ないのではしばらく休ませよ」と言つたので西和田は三浦を大石の陰で休息させ 人夫を呼ぶために下ることを述べると「よし待つべし」と言つた。この時の三浦は降石のため帽子を突き抜けて頭脳を打たれ 横腹及び右手に負傷し流血は顔面を染めていたが 精神はまだ丈夫だった。西山は1度は応答したがその後西和田が再三呼んだが遂に応えなかったと言う。



第2図 6月6日における噴口の状況
 イ. 80年前曾て噴火したもの
 ロ. 去月19日せきせつを貫き出来せしものにして 噴力休止せり
 ハ. 本月4日噴力衰へ 当今泥水を湛ゆ
 ニ. 本月4日前まで横孔をなし 矢の方向に噴煙せしも 4日以後2倍大の堅穴となり 当今噴勢最も盛なり
 ホ. 当今噴勢激烈なり
 ヘ. 去月19日出来しものとして当今泥水を湛ゆ
 (地学雑誌 vol.5, p.274)

甚兵衛小屋で西和田と比企は人夫を連れて上ろうとしたが戸板を被って伏せるばかりのため已むを得ず微温湯に救助を頼むため2人で1里半の道を走った。これはすでに疲労している2人であるから 1人だけならそれが倒れたならば目的が達しなく 2人ならば1人が倒れても目的を達することが出来ると判断したからである。途中巡回の巡查と人夫3名に会い急を報ずることが出来た。微温湯に着いた頃-12時30分頃-大爆発があって2人の生死は更に分らなくなった。

途中で会った水戸守二巡查は2人を救助するために登りはじめたが浄土平への途中で大爆発が起って 人夫は逃走してしまった。水戸巡查はそれに屈しないで上って行ったが 火山灰のため周囲は真暗となり 噴煙の中で漸く西山の倒れているのが遠望出来たが降石が激しくまたすでに絶命している様であった。三浦の場所は見えないが 12時の大爆発のため あるいは死亡したかも知れないので 更に人夫を雇って救出しようとして下山した。水戸巡查の全身は灰にまみれ 官帽も噴煙に奪いさらわれると言う惨状だった。

桐原彦吉警部は夜12時に部長巡查以下7名を率いて登

山して搜索を始め 午前4時過ぎに三浦の遺体を発見した。そこは西和田と別れた大石の下方6~7間ばかりの場所だった。西山については難行を極め 泥の中にわずかに毛髪があるのを認めたが これが西山の遺体だった。一同が泥を掘り下げたが遺体の上に大石があり時に降石があり危険だったが力を合わせて掘り出し微温湯に帰着したのは8日正午頃だったと言う。

福島県立図書館には当時の惨状を示す出所不明の絵図面が2葉残されている(文書番号 0021-74 及び75)。それによると「三浦技師ノ休ミシト認ムル所 岩石ノ高サ地上約八尺」三浦技師の創傷を示すものとして頭部について「降石ノ為メ打裂ケレ皮膚三角形ニ裂ケ頭蓋骨面ヲ顕シ且其骨面ニハ拇指大ノ穴ヲ穿テリ」とあり 西山については「西山雇頭部創傷 降石ニ打破ラレタル傷所」と頭部を示し「腹部ハ降石ノ為メ非常ニ陥没シ両足共ニ膝蓋骨ノ辺碎折サシモノ如ク且両脚部鮮血ヲ流シ右ノ脚部ニハ拇指大ノ降石ニ破ラレタル穴アリ 又右胸部ニハ一ノ擦過傷アリテ血液滲出セリ」と記されている。三浦の傍には雪塊があつた。

三浦宗次郎

吾妻山の悲劇は一世を震撼させた。弔慰の義捐金は全国から集り 遂には記念碑建設に名をかりて詐欺を行う者も現れる程だった。6月11日に行われた葬儀には祭文は浜尾新大学総長 菊地大麓理科大学長 巨智部地質調査所長以下数多く 会葬者も後藤象次郎農商務大臣 榎本武揚 ダイバーズ 地質調査所員 地学協会会員 学生生徒と堂に溢れて庭に佇む者も多かったと言う。

三浦にはすでに長女があつたがその年の10月に男子が出生したことが地学雑誌は伝えている。また東京地学協会は三浦の遺稿であつた「地学術語字彙」を山上万次郎が 編集して明治28年に地学雑誌7巻73号から76号まで附録としてつけたが 28ページで終わった。遺稿がここまでだったかは明らかでない。

地学雑誌 vol.5 では三浦の肖像と共に漢文で追悼を記した。現代文に読み下してみると次の通りである。

故三浦理学士伝

故農商務技師 正七位理学士三浦宗次郎君は三浦制充氏の二男なり。母は岩永氏。文久二年八月上野国沼田城に生まれる。家は世々国老なり。祖父敬充の時 宗家に嗣無し。敬充末家より入りてこれを嗣ぐ。末家これがため廃さる。敬充常に再興の意あるといえども 男は制充一人のみ。これをもって



第3図 三浦宗次郎(地学雑誌 vol.5)

未だその志を果さず。晩年にして君の生まれるに及び大いに悦びて曰く。吾が望み足れり明日瞑するといえど可なり。君は幼にして頓悟。八歳にして始めて郷学に入り一たび読誦する所有らば則ちこれを忘れず。師常にその強記を称す。こゝをもって在校の日は常に班首位たり。君は殊に数学を善くし好んでこれを試す。また八犬伝や三国誌を愛し閑あればこれをひもとき家人にその読む所を語りて糸毫も遺さず。明治八年東京に出て英語学校に入る。これに先んじて兄徳充君また東京に在学して数年居る。君よく兄に事えかつて不遜の行なし。その後予備門に移る。十三年東京大学理学部に入る。十六年学芸優等を以て給費生となる。十七年地質学科を卒業し理学士の学位を受く。この時に当たり父制充氏は祖父の遺志に従って君が末家の祀を継がんことを欲す。君固辞して曰く。児二男に生る。平民にして可なり。願わくは児をして畢生の力を斯学に致さんことを。末家を承けるが如きに至りては阿兄の子弟を待って議せんことを請うと。あえて肯んぜず。兄徳充氏そのしうる可からざるを知るといえども父の意を傷けんことを恐承。君をしてこれを暫諾せしむ。

卒業ののち教官となる。先ず静岡県師範学校に任じ中学校教諭を兼ねる。のち佐賀県に移る。君少にして活発すこぶる能弁たり。壯年に至るに及び漸く変じて深沈寡言の性となり喜努色に見せず。生徒を率い端正自ら持してかつて倦怠戲謔の容なし。すこぶるその畏敬する所となる。在職前後四年君自ら謂いて曰く。吾が志こゝに在らず。なんぞ久

しくこゝに*せんやと。七月遂にこれを辞す。校を去るの日暮って惜まざる者なし。十二月農商務二等技手に任ぜられ地質調査所勤務を命ぜらる。けだしこれ終生の志なり。二十一年農商務技師試補に任ぜらる。二十四年農商務技師に任ぜられ高等官七等に叙せらる。十二月從七位に叙せらる。

二十六年五月吾妻山破裂す。君特に調査を命ぜられる。六月再び破裂の報伝えられる。君また命ぜられる。翌黎明上程す。六日噴口に望む。七日再び登山するに爆裂にわかにかし。君遂に灰風石雨のうちに斃る。君職を農商務省に奉じてよりこゝに至る七年。その間に命ぜられて巡回すること十有一所。調査の図幅は六。曰く秋田本荘男鹿島足助名古屋豊橋。また別に東京湾水底の地質を調査し愛知県下の炭床を験定す。而してその調査する所はみなすこぶる精詳を致す。けだしその性の然らしめる所なり。また工手学校の囑託を受けるや鉱物及び地質の学を教授し地学協会員となりては編輯の事を掌どる。公務のかたわら余力あらば則ち挙げて斯学に致す。且つ性すこぶる素朴また他の嗜好なし。兄徳充氏かつて伝来の什器をさかんと欲す。君固辞して受けず。さらに不介の意ある者の如し。常に節約自ら持すといえども然るに親族故旧の急を見れば則ち己のこれを受けるに余力をおしまざるの如し。死の日に当たりては家に余財なくわずかに衣服数領あるのみ。吾妻山の報東京に達するや朝廷その公務に斃るるを称し俸二級を増賜し二百五十金を賞與す。また皇恩の優渥なる特に正七位に叙し祭祀料を賜う。けだし異例に出ざるなり。(* 一字不明)

君小牧氏を娶り一女を生む。享年三十有一。六



第4図 2つの殉難碑

月十日品川東海寺に葬る。君の死を聞く者 知るも知らぬも論ぜず 悼惜せざるなし。江湖の士資を醸して 君の身を公事に致し 力を學術の偉功挙に尽せしを彰わさんと欲す。あゝ君去ること己に遠しといえども英名永く汗青を照らし 世に教を益すなり。

西山惣吉

西山惣吉は安政2年(1855)8月東京に生れた。三浦より7歳年長である。元は消防組の頭であり性は勇侠と評されている。初めは大学に雇われていたが ある時失火があつたが 西山は火元に関する責任を一身に引き受けて 禍を他人に及ぼさなかつたため大いに賞讃されたと言われる。明治13年9月に一級定夫になり 12月には定夫世話方になったことが知られる。当時は任官者の下に雇があり 更にその下に定夫があつた。定夫は三級まででありその上に定夫世話方があつた。鉱山雑誌には地質調査所(?)の創立と共に小使いになつたと記されているが彼の履歴は明治13年9月の一級定夫から始つている。この時26歳だつたことになる。「地質調査所沿革及事業」には 傭が20名いたことになっているが 同じ年の農商務卿第二回報告では 月給10円以上12名10円以下が3名と記されている。定夫は更にその下で他に小使 経師 石工がいたらしいが 日給50銭以上1名 50銭以下14名となっている。現在名前が残っているのは 西山の他に中島己之助 樋口仁三郎などの人達である。定夫は所長以下の調査員が出張する場合に随行を命じられるので一般から三級までであつたらしい。西山は17年に雇になつたが日給35銭であり 昇給しても

50銭止りだつた。初期の頃はナウマンに随行することが多かつた。明治14年5月からは千葉県外9県へ 同年には青森県外8県 明治15年には7月から静岡県から佐賀県にかけて28県に随行した。明治18年からは原田豊吉について調査を行なつている。鉱山雑誌 第三号(1893)には西山について

雇外国教師出張ノトキハ常ニ之に随ヒ行キ 同氏ニ非ザレバ殆ント事ヲ弁セスト云フ有様ナリシカハ 習ウヨリ慣レヨノ例ヘ 見覚エ聞覚エ其道ニ通セシヲ以テ 遂ニ雇ニ登用サレタリト 去ル明治十五年八月雇外国人ドクトルノウマン氏が上州白根山噴火口調査ノ際随行シ 当時噴煙猛裂ナリシニ拘ラス 噴口及ビ熱湯ノ温度ヲ検測セン為メ 絶壁ヲヨゾ 断崖ヲ渡リ 辛シテ実験ヲ為シ終リ 後更ニ噴口壁ヲ廻リ対岸ニ至リ前ニ経過セシ所ヲ望ミシニ 峭壁裂ケ岩角聳エ 今ニモ墜落セントスル有様ナレバ 同行ノ人々ハ戦慄シタリト云フ 同氏ノ如キ豪膽ニシテ事ニ当リ身命ヲ顧ミザル如キ人ハ得難シ 皆ナ其死ヲ惜ミタリト 群馬県ヘノ随行は恐らく明治14年のことだつたと考えられる。

西山は明治20年に一時退職し 22年に復職したが間もなく御料局佐渡支庁に転じ 時25年11月に3度地質調査所に勤務することとなつた。雇で月給15円だつたが約半歳でこの難に遭つたわけである。即日技手に進められ 職務勲励で100円下賜されたと伝えられる。



第5図 三浦の殉難碑

年号	月日	官記	辭令及其他	事故	官職
明治十三年	九月六日	一級定夫	由月候事		初農務官
	十月五日	令般課員	安房土鑑十郎へ巡回	由月候事	全
	十二月九日	定夫世話方	由月候事		全
全	廿七日	令般課長	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	四月三十日	定夫世話方	由月候事		全
全	五月二十日	令般課員	青森縣外九縣巡回	由月候事	全
全	七月廿九日	令般課員	安房土鑑十郎へ巡回	由月候事	全
全	十月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	十一月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	十二月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	一月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	二月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	三月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	四月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	五月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	六月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	七月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	八月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	九月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	十月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	十一月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全
全	十二月廿七日	令般課員	埼玉縣下出張	由月候事	全

第6図 西山の履歴書(地質調査所長許可)

事件その後

吾妻山の遭難は一般社会に大きな衝撃を与えた。2人に対する義捐金が地学協会や各新聞社に寄せられた。遂には2人の記念碑を上野公園に建てることを名をかりて義捐金を集め 着服して遊びに費い果す者も出るに到った。また一部の心無い新聞は 同行した比企 西和 田の両名を不人情と非難したりした。地学倶楽部員は両名慰労を神田橋で開いたと言う。社会の善悪両面がこの遭難事件で現われてしまった。

2名の顕彰行事の1つとして肖像画の作成が計画された。三浦の肖像は浅井忠が 西山のそれは原田直次郎(豊吉の弟)が担当し 上野の帝国博物館に保存されたと言う(今井, 1966)。

翌明治27年10月 志賀重昂は「日本風景論」を出版しそれはたちまち版を重ねた。その中に三浦が第一回調査の際に撮影した噴煙の木版画と共に 以下の弔文を記して一般に感銘を与えた。

明治二十六年六月 岩代の吾妻山ふたたび爆裂す
理学士(地学専攻)三浦宗次郎 西山惣吉と共にすなわち山に登り 硫煙 熱灰 溶岩を冒し 里称「大穴」西南なる新噴口を探討し 坦然としてその所学を応用し 精査幾番 ついに「吾妻山の間歇噴出性なる事」を憑証し 斯学に一有益材料を寄附す。

同七日 三浦 西山 ふたたび噴口に至らんとす
午前十時 大地にわかにか轟然 満岳撼動 硫煙天を衝きて逆上し 熱灰飛風のごとく 溶岩乱雨に似 岩両士の頭脳を破碎し すなわち場に斃る。日本の武人戦場に斃る者 古往今来なんぞ限らん。ひとり斯学のために斃れたる者 「先哲叢談」前後兩篇中 たゞ一人あるのみ しこうして今や三浦 西山ここにあり。

想う日本国の地質図中 秋田 本荘 男鹿島 足助 名古屋 豊橋の図幅および東京湾水底の調査は 実に理学士三浦宗次郎の頭脳に頼りて大成せしもの。しこうしてこの頭脳や斯学のために破碎して棺を蓋う。直個に日本理学会の一好漢(講談社学術文庫版 昭和51年による)。

2人のために記念碑を建てようとする企画は早くからあった。7年過ぎた明治32年にも地学雑誌(vol.11 p.463)では 「職務に其身を致すは我日本に其例少からざるも 之と同時に科学に其軀を殉せるものの氏の如きは本邦に在て未聞の事蹟に属す。去るもの日に疎きは世情なれども此の如き事蹟を煙滅に帰せしむるは吾人斯学の為めに誠に忍ぶ能はざる所なり。聞く所によれば有

志者の間に氏と随行逢難者西山壮吉氏との為めに一碑を福島公園に興すの議ありと。ローゼンスタインの氷河大転塊にレオポルドフオンブッフ氏の記念碑を興せる例に倣いて 吾妻山出せる所の安土岩の一大塊を拉り来りて 両氏の名を其まゝ之に刻まば 彼の滔々たる世間碑裾の金色爛然一時人目を悦ばすもやがて亀裂剥落文字磨滅何人の断碑なるも弁せざるものとなるに反して 永遠追想景仰の情を起かさしむるあらん」と述べられている。しかし建碑の動きはその後続かなかつた。

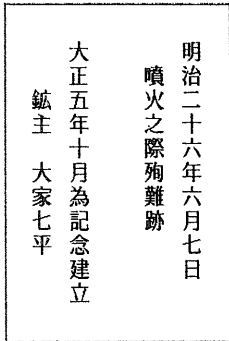
実際に碑が建てられたのは大正5年10月だった。当時は第一次世界大戦で日本は好況だった。硫黄山で硫黄を採掘していた大阪の人「大家七平」と言う人が慰霊のために建立したと言われる。碑は一切経火口の南東にあって 20~30m離れて2つの碑がある。火口に近い方が三浦のもの 下の方が西山のものである。本当は遭難の位置は両者は逆であるが 当時の考えではそれはともかくとして三浦の方を上へ持って行ったのが当然だったらしい。西山の碑の裏面には第8図のように記されている。三浦の方は石に埋れて見えないが 恐らく同様であろう。碑は福島県観光物産課の所管となっており 実際の管理清掃は浄土平の県営レストハウス管理人があたっている。

この事件について所の公式報告とも言うべき 農商務省地質調査所 地質調査所事業成績第二回報告(明治29年)は全く触れていない。

明治二十六年農商務省報告(第十三回)には以下のようにになっており 了解に苦しむ所である。



第7図 西山の殉難碑



第8図

五月中旬福島県下吾妻山破裂ノ報ニ接スルヤ直チニ技術員一名ヲ派遣シ実地調査ニ従事セシメ其状況ヲ報告セリ 其後翌六月上旬再破裂ニ報アルヤ更ニ技術員二名ヲ派遣シ実地踏査ヲナサシメシニ該員等不幸ニシテ俄然大破裂ニ遭遇シ重傷シタルヲ以テ 地質調査所長ハ属官一名ヲ随ヘ該地ニ派出シテ負傷者ノ処分ヲ了シ 尋テ実地調査ヲ継続セシムル為メ技術員一名ヲ派遣シテ其状況ヲ調査報告セシメタリ

派遣された調査員は鴨下松次郎だったらしく 彼の報告が地学雑誌にある。 なお三浦が第1回に採取したものについてはフェスカ (1895) が報告した。

地質調査所の殉難者

地質調査所に職を奉じた者は創立以来約1,800名である。 軍人以外で戦地に調査に赴いたのはすでに日清戦争に際して大本営の依頼によって巨智部忠承 鈴木敏 鴨下松次郎らが金州半島 (遼東半島の先端部) の地質・土性調査を行ったのを初めとしている。 これは日露戦争シベリア出兵に際しても行われ 第二次世界大戦と共に破局を迎えた。 一方探査技法の進歩と共に調査研究に際しての危険性が常に存在する様になった。 以下犠牲となった人々を挙げて 地質調査所の礎となった方達の御冥福を祈りたいと思う。

駒込 肇 昭和14年10月11日 新潟県中頸城郡保倉村青野において火薬の事故により殉職。 享年20歳。 同日付で技手となった。 同時に夫2名死亡 (17歳と18歳) 2名重傷。 彼についての記録は全く無い。
西川與志男 (29歳) 波多江清蔵 (37歳) 昭和17年12月30日 シンガポールセンワバン飛行場付近において航空機事故により殉職。 日本地質学会史-日本地質学会60周年記念誌 p. 77 に西川氏の事蹟がある。
磯崎三郎 (28歳) 和田政男 (28歳) 渡辺光樹 (27歳) 直井正作 (39歳) 竹田民英 (33歳) 伊藤 毅 (28歳)

石川栄一 (30歳) 守屋益男 (40歳) 森岡富造 (27歳) 青地清彦 (29歳) 昭和20年4月1日午後11時 台湾海峡における阿波丸で殉職。 同時に旧職員千谷好之助 (60歳) も死亡した。 これについては阿波丸殉難者追悼録 (地質調査所阿波丸殉難者追悼録刊行会 1979) がある。

相見角治 (57歳) 昭和20年10月2日 津山市から博多市の軍管区司令部に向う途中 風水害により鉄道不通となり 山陽本線大野浦駅から玖波駅まで徒歩の途中で転倒し 持病悪化のため民家に行き倒れた。 手術が必要だったが 交通通信が不通のため 収容されるべき病院もなく 翌々日死去した。 10月3日付広島県佐伯郡那波町長から家族あての書簡の写しが残されているだけで 所としての取扱いは一切不明である。

白土 忠 (38歳) 昭和23年8月3日 宇部沖における火薬事故により殉職。 全商工労働組合地質調査所分会史「大地に刻む」p. 44に「クリスチャンで温厚な人柄」と1行ある。

金子政利 (59歳) 藤本辨蔵 (58歳) 安藤高明 (46歳) 金井孝夫 (39歳) 昭和46年11月11日 川崎市生田地送り実験事故により殉職。 各人については 全商工労働組合地質調査所分会機関紙「大地」第399号 (昭和47年1月25日) 及び地質調査所昭和46年年報に記されている。

吾妻山殉難碑及び福島県立図書館の情報については 地殻熱部坂口圭一技官が親しく調査の労をとられた。 坂口技官は二階堂哲三氏及び県職員大内孝栄氏から教示されたとのことである。 上記の方々に厚く感謝する。

文 献

- 石井八万次郎・山崎直方 (1893) 吾妻山破裂探険余録。 東洋学芸雑誌 vol. 5, p. 317-325
- 比企 忠・西和田久学 (1893 a) 吾妻山巡回記。 東洋学芸雑誌 vol. 5, p. 326-330
- _____ (1893 b) 故三浦理学士吾妻山遭難実況 東京地学協会報告 vol. 14, no. 1, p. 87-97
- フェスカ, M. (1895) 火山噴出灰泥及ヒ硫酸噴気ノ為メ分解セラレシ岩石ニ就キ。 農学会会報 no. 26, p. 3-15
- 三浦宗次郎 (1893 a) 吾妻山破裂調査概説。 地学雑誌 vol. 5, p. 267-272.
- _____ (1893 b) 吾妻山破裂調査概況。 東京地学協会報告 vol. 14, No. 1, p. 67-74.
- 無署名 (1893) 嗚呼三浦君。 東洋学芸雑誌 vol. 5, p. 306-307.
- _____ (1893) 福島県吾妻山近傍大噴裂三浦西山両君遭難の顛末。 鉱山雑誌 no. 3, p. 105-115.
- _____ (1893) 西山技手の履歴。 鉱山雑誌 vol. 3, p. 124.
- 小川琢治 (1938) 一地理学者の生涯(三)。 地理教育 vol. 21, p. 298-304.